

2008 年 3 月 8 日

「森林の転換」に関する PEFC の立場表明

この度、PEFC 評議会は最近色々な議論的になっている森林の転換(林地から他の土地使用への転換や天然林から人工林への転換など)に関するPEFCの下記の立場を表明しました。この表明書のオリジナル文書(英文)はPEFC評議会のHPでご覧いただけます。

PEFC評議会の立場表明

森林の転換について

「人間は自らに与えられたものを増やす為にこそ創造性を与えられた。しかし、人間は創造をせず、破壊をした。森林はますます減少し、河は干上がり、野生の動植物は絶滅し、そして気候は荒廃した。」Uncle Vanya 1899.

アントン・チェホフは100年以上も前にこれらの言葉を書いたが、これらの言葉は今日の懸念を多く含んでいる。

森林、特に熱帯林の重要性に関する世界的な理解や今後起こり得るその消滅への懸念を考える時、その解決は一見単純であるかのように思われる。すなわち、自然のまま手を付けずにおくか、または私たちが使う木を元に戻すかである。それなら、何故これらに関する議論は何十年も荒れ狂って来たのか？

いや、全く単純ではないのである。社会は多くの事で森林に依存している。森林は私たちが呼吸する空気を清浄にし、気候の安定化に寄与する。さらに、原住民に資源と安全な棲家を、そして世界の工業に原材料を提供する。誰も森林が持続可能に管理されるべきことに異論はないが、それをどう実現するかについての考えには色々な違いがある。

森林開拓(Deforestation)という用語が森林の破壊について記述する際に良く使われる。これは、森林であった土地が切り開かれ、農業や建築など森林以外の目的に使用される場合に使われる。また、多くは不正確なのだが、原生の樹種でない樹木の植林や植栽密度を上げる場合など森林が変化や「劣化」を受ける場合などにも使われている。「森林開拓」を厳格な意味で一般的に使用することが広く許されているが、この変化や劣化をどう定義するかについてはしばしば大きな議論がある。

気候条件が、例えば熱帯林や温帯林の様な森林の種類を決定する。森林はさらに、その管理方法により二つに分類される。すなわち、天然林と植栽林である。天然、準天然、修正天然(modified natural)などの用語は人の介入のあるなしに関わらず原産樹種が生育する森林を表すために使われる。植栽林は、固有種や外来種を有する森林であり、プランテーションとは一般的に原産や外来の数種の樹種で同じ樹齢のものを一定のスペースに植えられるものを言う。

ごく最近まで、使用されるより多くの木が植えられれば、森林は永久に続くものと考えられてきた。森林開拓の問題が

政治的な問題として、また一般の人の心の中に強固な根を張るや、環境保護団体はこうした議論を森林の量的な問題から質的な問題へと拡大すべく多大な努力を払った。その結果、生物多様性、原住民の権利、森林の転換などの諸問題が取沙汰されてきた。

森林の転換、特に「天然林」から「人工林」への転換が重大な問題として浮上した。本来、「転換」とは一つのもを他のものへと変えることであり、故に、森林ではない土地を森林に転換することの説明に正当に使えるのであるが、残念なことに、今では否定的な文脈で使われるのが一般的である。

林業の問題を巡っては数多くの議論があるが、定義というものが決定的な重要性を持つ。これまで過剰とも言える組織が転換に関する見解や方針を展開して来た。こうした一連の見解の一方の端では、例えばWWFやグリーンピースのような団体は転換を「他の土地使用のために天然林が切り倒される破壊的な行為(WWF)」と見做す傾向がある。これらの団体は、彼らが重要な天然生息地を提供し、古くて稀有な樹種の生息場を与えるなどの点で特に需要であると考えられる高保護価値森林(HCVFs)の保護を切望している。最近ではHCVFsと森林保護は切り離せない程連携している。

民間企業、政府、木材加工企業などは転換林からの原材料の使用を排除する調達方針を策定している。「転換」の定義は色々であるにもかかわらず、森林から非森林への転換や天然林から人工林への転換を意味することに重きを置く傾向を強めてきた。世界銀行のような金融機関も転換を発生させる林業プロジェクトに対する融資には非常に綿密な制約を与えている。

無数の恩恵を提供する森林に対する需要が現在ほど大きい時はないことを念頭におくなら、そうした需要に応えるためには様々な森林の種類や管理技術が求められると言う結論は論理に適うものである。非常に複雑性を持つ問題を過度に単純化することは危険でもある。自論のみを囲い込むような頑固な定義のために、商契約への入札や融資の申請から締め出され、持続可能でないと言うラベルを貼られることは、特に途上国にとって破滅的なことである。

どんな森林であってもそれを変えようとする意思決定には、複雑な経済、社会、環境上の考慮が絡むものである。場合によっては、林業よりも性急な用地需要があることもある。転換(と人工林)は悪であるとする広く流布する発想には、こうした難問の存在や人の手による介入がなくても森林は常に変化するものであるという事実を無視する傾向がある。

PEFCは生態系の維持、増進への寄与を確約するものであり、これは価値を有する場所・区域は持続可能でなければならないということの意味する。PEFCはこの問題を取り巻く真の懸念事項とそれに伴う色々な感情について常に留意しており、この問題に対する理性的で綿密な調査をし、実効性を伴う行動計画を構築するために加盟メンバーやステークホルダーとともに大きな努力をすることを確約をし、この実現のために求められる十分な時間を奉げる用意がある。

2008年3月8日

PEFC評議